

卒部にあたって

四年生 桑鶴 智大

まず始めに、この翔友の原稿を後輩に依頼された際に「卒部するにあたっての感想というか、言いたいことをなんでも書いてください。」と言われました。

なるほど、“ざっくり”を体現したかのような依頼をされ正直何を書こうか悩みました。まったく、可愛い後輩です。実はこうして執筆している際も悩みながら綴っている最中です。

しかしながら、ここまで長い歴史を書き起こしてきた翔友に、卒部というタイミングで思いを述べることは非常にありがたいことと思ひ、こうして書かせていただきました。いかんせん、文章よりも数式や定理を相手にしている学部の方ですので、読み難い文章があるやもしれませんが、一生懸命にかつ、某法師よろしく徒然なるままに書くと思いますのでどうぞお付き合い下さい。

さて、まず私達の代の話、私自身の話をさせて頂きますと、実は私は入部直後から、視力検査で色弱体質と判定されまして、ライセンス取得どころかソロフライトすら叶わないという現実を叩きつけられました。

大多数の者が、「飛びたい」という志を持って入部してくる中で、それが叶わないと知った時は絶望しました。たまたま、なぜそのような境遇で部活を続けているのかと聞かれ、色々な言葉を返してきましたが、正直に申し上げますと惰性で続けた部分もあったように思います。

しかしながら、このクラブで四年間頑張ろうと決意して入部した私に退部という選択肢は不思議と無く、当時の先輩が「この部では他のことでも頑張れることは沢山あるから。」と言われ、その言葉に導かれるように、「よし、なら他の事で出来る

だけの事をやってやろう。」と思ひました。今更ながらではありますが本当にこれが一回生の考える事なのか。もっと可愛げのある考え方をしろよと当時の私に言いたいです。

当時の同期は、計七名。卒部現在で計四名となりました。時が経つにつれ、入部当初の「他の事で頑張ろう」が次第に「部のためというのは当然だけど、何よりこの同期のために頑張ろう。」という思いに変わりました。これは、同期の皆からしたらちょっとしたプレッシャーになっていたやも知れませんが、「自分の分もフライトをしてくれ、ライセンスを取って大会で活躍してくれ、代わりに俺はドライバーも牽引も整備も動力も引き受けるから。」と言う言葉はとすれば、一種の夢の押し付けだったのかも知れませんが。

ですが、彼らはそのプレッシャーになるであろうことに対していつも「おう、頑張るよ。」と変わらぬ表情で返してくれていました。結果として、我々の代は一人のライセンシーも生むことが出来ずに、私自身も動力とはいえ、リトマン止まりで牽引も単座牽引止まりでした。傍から見れば功績を残していない代と思われるでしょう。私も、そして同期の皆も、決して要領が良くなく、結果もこのようなもの。皆、改めて四年間を振り返ってみれば悔しいことが多い結果だと思うことでしょう。

しかし、四年間が終わってみると、なぜそれでも四年間通して頑張ってきたのかというと、やはり同期の存在が大きかったのではないのでしょうか。

私達の代は皆二回生から幹部をやるという異例の措置を余儀なくされた代でした。私は、一回生

の終わり頃に主将をやってくれと言われ、そこから二年間主将の任につきました。今になって思うと、入部して一年が経過したばかりの部員に二年目からは主将を勤めてくれという事は、物事への決断力や考え方、自覚の持ち方をしっかり持っているか等々を考えると結構な無茶ぶりだったのではないかと思いますが、同時にそれほどにも緊急事態だったのではないかと察しがつきます。

しかし、私たちは良くも悪くも仲が良く、そのおかげで四年間やってこられました。主将の立場上、彼らの誤りや失敗で教官や他方にご迷惑をお掛けして、そのせいで怒られることが多々ありました。その他に色々、詳細に書き記しますと恐らく立派な論文が一冊出来上がってしまうので割愛させていただきますが、少なくとも組織の幹部としてやっていく中で、私も含めて少なくとも有能な者たちではありませんでした。

それでも、命じた仕事を拒否されることはほとんどなく、話し合いをするにしても互いの意見を否定するのではなく、交換して話し合うことが出来ましたし、部活外でもよく一緒に遊ばず、後輩からは関係が良くないように見えていたやも知れませんが、それでも私にとっては、四年間苦楽を共に出来たいい同期であり、だからこそこまでやれたのだと思います。

さて、私達の話をもっと長々とするだけではと思いますのでこの場を借りて、以上のような同期と過ごした部員生活を踏まえて、今の後輩達、そして未来の後輩達へアドバイスという名の「贈る言葉」を何点か述べたいと思います。ここからは少しおじさん臭い文章になるかも知れないので、「あのOBのおじさんこんなこと考えてたんだあ。へ

え。」くらいに思っただけで頂けるといいかと思えます。

まず、「組織とは一人では出来ないということ」です。何をこのおじさんは当たり前のことを言っているんだと思うかも知れませんが、この事を常に忘れずに航空部はじめ、全ての組織に所属することが非常に大事だと思います。今後自分一人で何とかしなくてはと思いがちになることがあると思います。でも、それは組織にいる以上あってはならないことで、皆で何とかしなくてはと思う事、また周りの仲間達は、一人だけに何とかしなくてはと思わせない事、そして実際に皆で乗り切ることが大事だと思います。そうすれば大抵のことは上手くやっていけるでしょう。部員・仲間の事をお互いに考えて思いやりを持つ事が大事であると思います。私が三回生の時に現役であった部員には言ったことがあるのですが、「主将を決める際に、『こいつになら任せられる』で決めるな。『こいつと一緒に自分も頑張っていける』という人を選ぶ。」というのはそういう考えから来ているものです。任せられるという風に役職を投げるのではなく、一緒に頑張っていく代表として選ぶ。この考え方が組織を上手く回すコツではないでしょうか。

次に、「感謝と思いやりを忘れない」ですね。部活も組織であり、個人に出来ることは限られてくる以上、出来ないところを互いに補い合って運営する必要があります。しかしながら、その補い合いが当たり前になってくると、ああしてもらうのが当たり前と思うどころか、何も感じなくなる者が出てくるのが常のような気がします。しかし、そのようなことは本来あってはならないし、折角皆の為に思っただけでやっている者のモチベーションも下がり、志を一つに出来なくなるという状況

になるのを多少なりとも見てきました。思いやりがないのも然り、ある特定の者が酷使され損するという状況を作るのも部一つにさせない原因の一つになります。皆で頑張って一つのよい部を、良い活動と思うのならこれを忘れないことです。特に中心に立つ人は忘れてはならないことでしょう。

最後に、「やるべきことをきちんとやったならば、後は楽しめ。」です。文字通りの意味です。特に私の四回生時の後輩達なら言っていることは、わかるだろ？

長々と徒然なるままに書かせて頂きましたが、最後にこの場をお借りしまして 2014 年度同志社大学航空部卒部生を代表して、感謝の言葉を述べたいと思います。

田口教官、宮地教官。四年間お世話になりました。合宿のことを始め、様々なご指導を頂きました。ありがとうございました。また、沢山ご迷惑をお掛けし申し訳ございませんでした。最後まで、立派な生徒になれた自信はありませんでしたが、ご指導頂いた事を今後の人生につなげ励んでいこうと思います。

山口部長先生。部の相談や部のあり方等々ご鞭撻頂いたことは、私の先輩としての、そして主将としての大事な考え方の根幹になりました。ありがとうございました。

森川監督、前田コーチはじめ、同志社教官の皆様、本当に長い間お世話になりました。特に森川監督と前田コーチにはここまで本当に沢山の相談に乗って頂き、またご迷惑をお掛けしました。ここまでやって来られたのも特にお二方のお力添えのおかげとっております。我々は良き指導相手

では決してなかったやもしれませんが、決して見捨てず最後までご指導ご鞭撻頂きありがとうございました。

OB の皆様。これまで、ご支援のほどありがとうございました。そして、改めましてこれからよろしくお祈りします。

一回生からここまで指導して頂いた先輩方。とうとう私達も卒部です。先輩方が残してくれたものをどれだけまた後輩に残せたかわかりませんが、後輩たちが残せたものを掴んでくれて良い部にしてくれると願っています。とりあえずではありますが、ここで一区切りです。今までありがとうございました。

最後に、後輩達へ、今までありがとう。そして、君達が卒部するその時に、「やり遂げてよかった。なんだかんだ楽しかった。」と言えるような残りの航空部ライフを送って下さい。ありふれた言葉ではあるけどそれが一番大事だと思うので。